
心奪われて...

紅蜥蜴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心奪われて…

【コード】

N6820N

【作者名】

紅蜥蜴

【あらすじ】

毎日通る場所で変わった格好の女性がいた。

空の境界の両儀 式が相手のツンデレ恋愛短編小説です。

(前書き)

クロスオーバー連載小説と嘘予告を書いていたら、たまには短編小説を載せてみたいと思い、私が運営していたサイトにあったものをコピペして掲載してみました。

甘さはそんなに無いかもしれません。

彼女はいつも一人どこか浮いている

どこか物憂げな目をしていて

でも何だかそんな彼女が美しく見えて

いつもの町並みの中で彼女を見つけると必ず目で追ってしまっ

これはもう既に

彼女に心奪われたというのだろうか？

季節は冬

いつも大学へ行く時に通る道。

そこは都市の一角で人の行き交いが中枢ほどではないにしても随分通るため、歩きで通るしかない。

今まではそこは飽くまで通り道でしかなかった。

だが、そんなある日、ただそこを通る中で俺は一人の女性に目が釘付けになった。

セミロングの黒髪、青い着物に赤い革ジャン、そして茶色のブーツを履いた変わった格好をしていた。

一見ただ変わってるだけのはずの格好が、彼女には凄く似合ってた。かっこよく見えた。

そんな彼女に俺は心惹かれた。

その日から、俺は彼女を見つける度に目で追うようになった。

ある日、俺は休日でもやることもなかったなのであの通り道にあるレストランで食事を摂ることにした。

思いの他、座ることが出来たがその後、瞬く間にほぼ満席になった。

オーダーが決まって店員を呼ぼうとしたら、店員が先にこっちに来た。

「すみません、お客様。現在、満席となっております。お一人のお客様をこちらに案内しようと思いましたが宜しいでしょうか？」

俺としては一人でゆっくり食べたかったが、周りも考えて了承することにした。

そして、俺は案内された人を見て内心驚いた。

なんと、あの和服と赤い革ジャンの女性だったのだ。

その女性は座って開口一番、こっぴど俺に言ってきた。

「お前、最近俺を見る度に目で追っているよな？」

「!?!」

彼女の鋭く細められた目に見られながら俺は正直に言うか迷った。

だが、ここで彼女に正直に話した方が余計な面倒にならずに済むと
いうことで正直に話す。

「そう…だね。」

「で、俺に何かあるのか？それとも、この格好が珍しいからか？

事と次第に困ってはお前を殺す！」

彼女から言い知れないような殺気が放たれる。

隠せないと思って俺は彼女に正直に言うことにした。

「いや、何て言うか…君が美人だなと思ったから…。」

我ながら恥ずかしいことを言ってると思う。

多分、今の俺の顔は猿みたいに真っ赤だ。

「なっ!?!」

俺の言った言葉が意外だったのか、今度は彼女が真っ赤になる。

「お、お前にそんなこと言われても嬉しく…ない…から。」

彼女は立ち上がって大声を出す、周りの目と羞恥心で次第に勢いが無くなっていった。

そして勢いを無くした彼女は諦めて椅子に座る。

数分後

二人とも恥ずかしさのあまり、何も注文も無しに黙っていた。

（ああ、何だこの気まずい空気は！何か言わないと、何か言わない

と、何か言わないと！)

もう内心、混乱していた。

(ええい、こっぴなったら！)

「あの…。」

「…何だ？」

俺もまだ顔が赤いが、彼女はそれ以上だった。

…もう腹はくくった。

「俺と…付き合ってください…!!」

「…!!?」

彼女は告白されて呆然としてしまった。

…駄目か？

「…っ、こんなところでそんなこと言つなよ…。」

やっぱり駄目か!?

「で、でも、お前がそこまで言つなら…付き合つてやらんこともない。」

え、マジで?

「か、勘違いするなよ!飽くまでしか、仕方なくだからな!」

顔真っ赤にして噛みながら言つなんて…

うわ、すごく可愛い…。

パチ

パチパチパチ

パチパチパチパチ…

ってなんか周りから拍手されている!?

「いいぞ、兄ちゃん!」

「お二人さん、お幸せに〜!!」

やべ、恥ずかしいわ…。

俺たちは店を出て、だれもない公園のベンチに座っている。

…あいつのせいでもう店にいる間、恥ずかしかった。

それにしても何で俺はあんなこと言ったんだろう?

…考えても仕方ないな。

「なあ、キス…してもいいか?」

またこいつは、何を言い出すんだ!?

また恥ずかしくなってきた。

「な、何でお前に…。」

「付き合っつて言ったんだからいいだろ？」

確かに言った手前で断る訳にはいかない。

いや、断りたくない。

！？

そうか、気になっていたのは俺も同じだったのか…。

「…目を瞑ってる。」

奴が俺に言われた通り、目を瞑る。

俺は間髪入れずに奴の唇と自分の唇を重ねた。

「ん…。」

もう奴の心臓の鼓動が胸を触ってもいないのに分かってしまう。

「ふう…。」

俺はゆっくりと唇を離す。

「そういえば、名前教えてなかったな。」

「そうだな。俺の名前は##NAME1##って言うんだ。君は？」

「俺の名前は…。」

両儀 式だ。

そう言い切ると今度は##NAME1##に唇を奪われる。

心奪われたのは…私の方だった

オマケ

式と付き合ってから、俺は彼女に文句を言われながらも甘い一時を式と共に過ごしていた。

ただ、一つ問題がある。

「いらっしゃいませ。あら、あの時のカップルの方ですね？」

「おう、兄ちゃん！彼女とは上手くいつてるか？」

あのレストランでの告白のせいで周りから必要以上に声をかけられるようになってしまったのだった。

場所を弁えるべきだったか？

f i n .

(後書き)

私は他に

魔法少女リリカルなのは×機動戦士ガンダム00

でニール・ディランディ主人公の連載小説を書いています。

興味があれば是非お越し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820n/>

心奪われて...

2010年10月11日03時47分発行